

ヨハネの福音書 11 章の「ラザロというしるし」

ベレーシート

●ヨハネの福音書は「しるしの書」です。多くのしるしがありますが、そのしるしはイエシュアを証しするものとして預言的であり、奥義的であり、重層的です。11章で「ラザロ」に啓示されているしるしは重要です。なぜなら、病気で死んだラザロをイエシュアがよみがえらせて、いのちを与えたからです。ヨハネ5章でも38年間病気であった人を癒やしたことがありましたが、病気で死んで四日たったラザロを生き返らせたしるしは、まさに「わたしはよみがえりです。いのちです」と言われたイエシュアの神性をこのうえなく証しするにふさわしいものです。今回のテキストは1～27節です。段落ごとに説明しながら進めたいと思います。最初の段落は1～4節です。病と死は直結しています。しかし主にあっては「死に至る病」ではなく「死に至らない病」となるのです。

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 11 章 1～4 節

- 1 さて、ある人が病気にかかっていた。ベタニアのラザロである。
ベタニアはマリアとその姉妹マルタの村であった。
- 2 このマリアは、主に香油を塗り、自分の髪で主の足をぬぐったマリアで、彼女の兄弟ラザロが病んでいたのである。
- 3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。
「主よ、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です。」
- 4 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることとなります。」

1. 「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのもの」

●1～2節に目を留めましょう。そこには「ある人が病気にかかっていた」とあり、その人が「ベタニアのラザロである」こと、「ベタニア」は彼が住む村の名前であり、彼の家族がマリアとその姉妹マルタであったことが紹介されます。「ベタニア」はヘブル語で「ベート・アヌヤー」(בֵּית אֲנָת)と表記します。【新改訳 2017】では「ベタニヤ」から「ベタニア」に改訂されました。それはギリシア語の Βηθανία の音訳に従ってですが、ヘブル語から見るならば「ベタニヤ」が原語に近いのです。そしてそれは、「貧しく、苦悩の、へりくだった、柔和な者にふさわしい家」とも訳せます。

●「ラザロ」のギリシア名は「ラザロス」(Λάζαρος)ですが、彼はユダヤ人ですから、彼のヘブル名は「エルアーザール」(אֵלְעָזָר)と表記されます。それは「神は助け、あるいは「神を助けとする人」という意味になります。アブラハムの最年長のしもべであった「エリエゼル」(אֵלִיעֶזֶר)も「私の神は助け」という意味ですから、「ラザ

ヨハネの福音書の「エキス」

口」と同じ意味を持った名前といえます。この「ラザロ」のことを、「**あなた(主)が愛しておられる者**」(3 節)、「**わたしたちの友ラザロ**」(11 節)と言い変えています。ヨハネの福音書は「しるしの書」ですから、ラザロという名前は単なる一個人名ではなく、「主が愛しておられる者」「わたしたちの友」は、すべて「ラザロ」とみなすことができます。それは「いのちの書に名が記されている者」を代表する名前と考えることができます。そのラザロがここでは「病んでいた」(הִלָּח)のです。本来なら「死に至る病」ですが、イエシュアによってよみがえることで「死に至ることのない病」とみなされているのです。ですから、**ラザロは永遠のいのちを与えられたすべての者のしるし**となっています。再度、3~4 節に目を留めましょう。

3 姉妹たちは、イエスのところに使いを送って言った。

「主よ(יְהוָה)、ご覧ください。**あなたが愛しておられる者が病気です。**」

●使いの者が「あなたが愛しておられる者が病気です」と言っていますが、すぐに来て癒やしてくださいとは言っていない。イエシュアに任せるかたちです。でも実際は、重篤な病であり、「死に至る病」なのです。神の民イスラエルにおける死に至る病とは一つの罪を指しています。それは**偶像礼拝の罪**です。「ご覧ください」と訳された「ヒンネー」(הִנֵּה)は、終わりの日を喚起する語彙です。そのときに、イスラエルの民は獣と呼ばれる反キリストに騙されて、彼をメシアと信じてしまうのです。これはまさにイスラエルが歴史の中で繰り返してきた重篤な「死に至る病」です。ですから、ラザロの姉妹たちは、「主よ(יְהוָה)、ご覧ください。あなたが愛しておられる者が病気です」と訴えているのです。

4 これを聞いて、イエスは言われた。「この病気(הִלָּח)は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります。」

●4 節の原文直訳

「その病気(病=アッセネイア/ἀσθένεια/הִלָּח)は死に向かう(πρός θάνατος)のではなく、むしろ(かえって/ἀλλά)神の栄光のためです。それ(=病気)を通して、神の子(=御子)が栄光を受けるためです。」

●「それを通して、神の子(御子)が栄光を受けるため」とはどういうことでしょうか。9 章で、盲人が盲目で生まれたのは「神のわざ(複数)が現れるため」とありました。神の栄光とは御子が栄光を受けることでもあります。それは**イエシュアの中へと信じる者に、神の数々のわざが連鎖的に現されるということです。**

●ところで聖書で最初に「病んでいた」人物として登場するのは**ヤコブ(=イスラエル)**です(創世記 48 章)。それは単に「死に至る病」ではなく、神の数々のわざが現される契機となっています。ヤコブとヨセフは御父と御子のように一体です。父ヤコブに愛されたヨセフは、父が病気で死ぬ前にエジプトで生まれた二人の息子マナセとエフライムをヤコブのもとに連れて行きます。ヨセフは長子の権利を与えられていたため、二倍の祝福を受ける権利を有していました。それゆえヨセフの二人の息子であるマナセとエフライムはヤコブの祝福を受けてヤコブの実質の子となったのです(48:5)。これは「死に至る病」ではなく、「死に至らない病」の型です。なぜなら、ヤコブの実質の子とされたマナセとエフライムは、ヤコブにとってもヨセフの生涯にとっても栄光を受けることにな

ヨハネの福音書の「エクス」

るからです。「マナセ」(מָנַסֵּי) という名前は「神が私のすべての労苦と私の父の全家とを忘れさせた」という意味です。語源は「忘れる」を意味する「ナーシャー」(נָשָׂא)ですが、接頭語の「メーム」(מ)が付け加えられることで「マナセ」となります。「マナセ」は「赦す」という意味です。ヨセフはこれまで自分が経験した苦しみの中に、自分の父のことや兄弟たちにされたことを忘れさせるほどの、帳消しにするほどの、神の臨在の祝福とご計画を見出したことを「マナセ」という名前の中に示しています。また「エフライム」という名前は、「神が私の苦しみの地で私を実り多い者とされた」という意味です。「エフライム」(עֵפְרַיִם)の語源は「多くを実らす、繁殖する」を意味する「パーラー」(פָּרַר)です。ヨセフ自身「実を結ぶ若枝」とも預言されています。ヨセフの二人の息子の名前に込められた預言が成就するのは、「終わりの日」における「イスラエルの残りの者」においてです。とすれば、「死に至らない病」のラザロは、「イスラエルの残りの者」を指し示す預言的な型であると言えるのです。「終わりの日」における「イスラエルの残りの者」は、イエシュアのいのちを与える霊(恵みと嘆願の霊)によって悔い改める者たちであり、それは復活中の復活の出来事なのです。イエシュアが語った「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることとなります」(4節)とは、こうした数々の含みをもって重層的に語られているのです。

2. 「わたしは彼を起こしに行きます」

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 11 章 5～16 節

5 イエスはマルタとその姉妹とラザロを愛しておられた。

6 しかし、イエスはラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられた。

7 それからイエスは、「もう一度ユダヤに行こう」と弟子たちに言われた。

8 弟子たちはイエスに言った。

「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか。」

9 イエスは答えられた。

「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまづくことはありません。

この世の光を見ているからです。

10 しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです。」

11 イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。

「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」

12 弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」

13 イエスは、ラザロの死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。

14 そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言われた。「ラザロは死にました。

15 あなたがたのため、あなたがたが信じるためには、わたしがその場に居合わせなかったことを喜んでいます。

さあ、彼のところへ行きましょう。」

16 そこで、デドモと呼ばれるトマスが仲間の弟子たちに言った。

「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか。」

ヨハネの福音書の「エクス」

●5～6節では、イエシュアがマルタとその姉妹とラザロを愛しておられたにもかかわらず、ラザロが病んでいると聞いてからも、そのときいた場所に二日とどまられたとあります。実際はその二日の間に、ラザロは死に墓に葬られていたのです。ですから、「二日とどまられた」ことは、最高度の栄光を表すイエシュアの戦略でした。

●7～16節まで、イエシュアと弟子たちとのやり取りが記されていますが、その会話はかみ合っていません。イエシュアが「もう一度ユダヤに行こう」と言ったのに対し、弟子たちは「先生。ついこの間ユダヤ人たちがあなたを石打ちにしようとしたのに、またそこにおいでになるのですか」と問い返しています。イエシュアの一行は今一体どこにいるのでしょうか。10章40節によれば、イエシュアは「再びヨルダンの川向こう、ヨハネが初めにバプテスマを授けていた場所に行き、そこに滞在された」とありますから、イエシュアの一行はヨルダンの川向こうにいるのです。その「場所」とは、神殿ユダヤ教と律法主義というストイケイアから離れた場所にいることを物語っています。しかし再びユダヤに戻るならば、石打ちに合うかもしれません。そのため、イエシュアがラザロのところに行こうと言われたので、トマスは仲間の弟子たちに「私たちも行って、主と一緒に死のうではないか」と言います。イエシュアとともに苦難にあうだけでなく、死ぬことさえもいとわない旨を伝えています。これはのちにペテロと他の弟子たちが言ったことと同様です。とても勇ましいのですが、それが肉による熱心さだとは気づいていません。決してそのようなことにはならないのです。というのは、「イエシュアの行くところ(つまり受難と死)に、弟子たちはついて来ることができない」からです(ヨハネ 13:33)。それが主の定めだからです。

●弟子たちの心配にイエシュアは9～10節で「昼間は十二時間あるではありませんか。だれでも昼間歩けば、つまり歩くことはありません。この世の光を見ているからです。しかし、夜歩けばつまづきます。その人のうちに光がないからです」と答えています。これはどういう意味なのでしょう。その前に、よく似たことばをイエシュアは9章4節で語っていました。そこでは「わたしたちは、わたしを遣わされた方のわざを、昼のうちにを行わなければなりません。だれも働くことができない夜が来ます」でした。ここでは夜が来れば働くことができなくなるので、昼の間に急いで働くようにという意味です。しかし今回の11章では反対の意味で語られています。つまり昼間は十二時間あるのだから、あわてることはない、世の光であるイエシュアを内に持っているなら、あわてることなく、つまづくこともない。だからゆっくりと構えていなさいという意味です。

●11節以降は弟子たちに「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」と呼びかけます。イエシュアはラザロが死んだことを誰からも聞かされていないはずですが、「ラザロは眠ってしまいました。(だから)わたしは彼を起こしに行きます」と言っています。イエシュアによれば、「死ぬ」と「眠る」ことは同義です。「わたしは彼を起こしに行きます」と言っているのですが、弟子たちは「眠る」ことを睡眠のことだと理解しています。霊であるイエシュアのことばをたましいで受け取っているのです。イエシュアがラザロを「起こしに行く」とは、終わりの日に「イスラエルの残りの者」に対する、また先に永遠のいのちに与った私たち「エックレーシア」に対する「死からの復活」を、重層的に啓示しているのです。

3. 御国の福音の到来における「すでに」と「いまだ」の緊張関係を知る

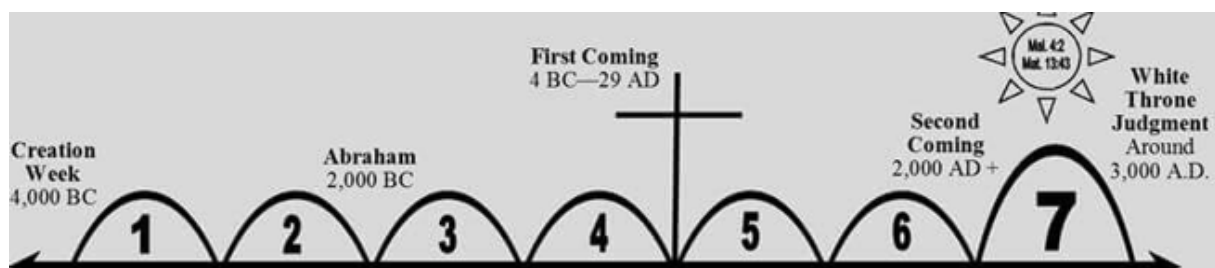
ヨハネの福音書の「エクス」

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 11 章 17～27 節

- 17 イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れて、すでに四日たっていた。
- 18 ベタニアはエルサレムに近く、十五スタディオンほど離れたところにあった。※15 スタディオンは約 3 *。
- 19 マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。
- 20 マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。
- 21 マルタはイエスに言った。「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。
- 22 しかし、あなたが神にお求めになることは何でも、神があなたにお与えになることを、私は今でも知っています。」
- 23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります。」
- 24 マルタはイエスに言った。「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています。」
- 25 イエスは彼女に言われた。
「わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです。
- 26 また、生きていてわたしを信じる者はみな、永遠に決して死ぬことはありません。
あなたは、このことを信じますか。」
- 27 彼女はイエスに言った。
「はい、主よ。私は、あなたが世に来られる神の子キリストであると信じております。」

(1) なぜ「四日」？

●17 節に「イエスがおいでになると、ラザロは墓の中に入れて、すでに四日たっていた」とあります。なぜ、「墓の中に入れて、すでに四日たっていた」のでしょうか。三日目でなくて、「すでに四日たっていた」ということは、五日目にイエシュアはラザロを起こしたことになります。なにゆえに「四日」なのでしょう。日本の場合、死後 24 時間経たないと火葬はできません。当時のユダヤでは、遺体を墓に納めたとしても死を確認するのに三日間を必要とし、四日目以降は魂が戻れないと信じられていたようです。しかし、この「四日間」について別の解釈もあります。その解釈によれば、神には七千年の計画があるというものです。このことから「すでに四日たっていた」ということです。神にとっての一日は千年とみなされることから、「四日」は「四千年」を指します。イエシュアが登場するまでに、「すでに四千年が経っていた」のであり、五日、つまり五千年が始まる時代に「眠った者を起こす」ことをはじめられたということ。盲人の目を開けるのもメシアしかできませんが、眠り(死)から起こすこともメシアしかできません。それゆえこの奇蹟はイエシュアが神であることの重要なデモンストレーションなのです。



ヨハネの福音書の「エクス」

- (1) 天地創造(アダム創造)からアブラハムまでは2千年。(2)アブラハムからイエシュアまでは2千年。
- (3) イエシュアの時代から再臨までは2千年。
- (4)6千年後、イエシュアは再臨して千年間をメシア王国として統治する。

(2) 「家で座っているマリア」

●19～20節には「マルタとマリアのところには、兄弟のことで慰めようと、大勢のユダヤ人が来ていた。マルタは、イエスが来られたと聞いて、出迎えに行った。マリアは家で座っていた。」とあります。「お爺さんは山に芝刈りに、お婆さんは川に洗濯に」ではありませんが、マルタとマリアの仕事が分担されているように思えますが、ユダヤの葬儀を知れば理解できます。当時のユダヤの風習では故人が墓に葬られている間、友人たちがやって来て故人が生前使っていた家具を全部ひっくり返すことがあったようです。ですから、そこに帰って来た者は、そのごった返した中で座り込んで泣いたそうです。20節の「マリアは家で座っていた」という記述には、そうした死の悲しみの風景が記されているのです。

(3) マルタの信仰

●21～27節まで、マルタとイエシュアとのやり取りが記されています。マルタの発言の意図は何でしょうか。

23 イエスは彼女に言われた。「あなたの兄弟はよみがえります(未来形)。」

24 マルタはイエスに言った。

「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえる(未来形)ことは知っています。」

25 イエスは彼女に言われた。「わたしはよみがえりです(現在形)。いのちです(現在形)。

わたしを信じる者(現在分詞)は死んでも生きるのです(未来形)。

26 また、生きていてわたしを信じる者(現在分詞)はみな、

永遠に決して死ぬことがありません。

(ウー・メー：οὐ μή で二重否定となっており、永遠に「死ぬ」ことがないことが強調されています。)

あなたは、このことを信じますか(現在形)。」

27 彼女はイエスに言った。

「はい、主よ。私は、あなたが世に來られる神の子キリストであると信じております(完了形)。」

●マルタの「終わりの日のよみがえりの時に、私の兄弟がよみがえることは知っています」とは、ダニエル書12章に記されていることです。ユダヤ人ならこのことは良く知られていたということです。2節に「ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます」とあることから、おそらくマルタはそうに言ったと思われる。

【新改訳2017】ダニエル書12章1～3節

1 その時、あなたの国の人々を守る大いなる君ミカエルが立ち上がる。

国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時が来る。

ヨハネの福音書の「エクス」

しかしその時、あなたの民で、あの書に記されている者はみな救われる。

2 ちりの大地の中に眠っている者のうち、多くの者が目を覚ます。

ある者は永遠のいのちに、ある者は恥辱と、永遠の嫌悪に。

3 賢明な者たちは大空の輝きのように輝き、多くの者を義に導いた者は、世々限りなく、星のようになる。

(※「賢明な者たち」とは「イスラエルの残りの者」のことです。しかしここでは隠されています。)

●マルタのことばとイエシュアのことばはどこが異なっているのでしょうか。御国の福音の到来における「**すでに**と**いまだ**の緊張関係」のバランスを知る必要があります。私たちはマルタのようにアンバランスな見方をしすぎてしまいやすい者です。どちらかに偏りやすいのです。「**すでに**」が強調されると「神の国があなたがたの近くに来ている(=ただ中にある)」(ルカ 10:9)、および「わたしが神の指によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」(同 11:20)となります(=「**実現された終末論**」=神が定められていることが完全に到来したこと)。しかし「**いまだ**」が強調されると、「そのとき、人の子のしるしが天に現れます。そのとき、地のすべての部族は胸をたいて悲しみ、人の子が天の雲のうちに、偉大な力と栄光とともに来るのを見る」(マタイ 24:30)となります(=「**実現しつつある終末論**」=神が定められていることが完全に到来しつつあること)。ここでの「そのとき」とは、ダニエル書 12 章 1 節の「国が始まって以来その時まで、かつてなかったほどの苦難の時」です。「平和の神は、速やかに、あなたがたの足の下でサタンを踏み砕いてくださいます」(ローマ 16:20)に「**速やかに**」とありますが、「未曾有の苦難」を経ることなしには、神のご計画が実現されることはないのです。

(4) 「決定的勝利」と「究極的勝利」

●20 世紀の新約学者オスカー・クルマンは、その著「キリストと時」の中で「戦争における決定的戦いはすでに為されています・・・にも拘らず、戦争はまだ続行しているのです」と述べて、それを第二次世界大戦における D-day (ノルマンディー上陸作戦；フランスへの決定的上陸の日) と、V-day (ヨーロッパ戦勝記念日；連合国の最終的勝利の日) に譬えています。つまり、イエシュアの十字架の死と**復活**は D-day に相当し、イエシュアの**再臨**は V-day に相当します。ちなみに、D-day の「D」は「決定的な」を意味する Deterministic、V-Day の「V」は「究極的勝利」を意味する Victory です。このことをバランスよく理解することが重要なのです。

●11 章 25 節のイエシュアのことばはそのことを表しています。

わたしはよみがえりです(**現在形**)。いのちです(**現在形**)。

わたしの中へと信じる者(**現在分詞**)は死んだとしても(**過去形**)生きるのです(**未来形**)。

●「すでに」と「いまだ」のバランスを正しく保ちながら、霊によって歩めるよう、シエーム・イエシュアによって祈ります。

三一の神の霊が、私たちの霊とともにおられます。

2024.10.27

ヨハネの福音書の「エクス」

【新改訳 2017】ヨハネの福音書 11 章 28～57 節

- 28 マルタはこう言ってから、帰って行って姉妹のマリアを呼び、そっと伝えた。
「先生がお見えになり、あなたを呼んでおられます。」
- 29 マリアはそれを聞くと、すぐに立ち上がって、イエスのところに行った。
- 30 イエスはまだ村に入らず、マルタが出迎えた場所におられた。
- 31 マリアとともに家にいて、彼女を慰めていたユダヤ人たちは、マリアが急いで立ち上がって出て行くのを見て、墓に泣きに行くのだろうと思い、ついて行った。
- 32 マリアはイエスがおられるところに来た。そしてイエスを見ると、足もとにひれ伏して言った。
「主よ。もしここにいてくださったなら、私の兄弟は死ななかつたでしょうに。」
- 33 イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。
そして、霊に憤りを覚え、心を騒がせて、
- 34 「彼をどこに置きましたか」と言われた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。
- 35 イエスは涙を流された。
- 36 ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」
- 37 しかし、彼らのうちのある者たちは、
「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにすることはできなかったのか」と言った。
- 38 イエスは再び心のうちに憤りを覚えながら、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがれていた。
- 39 イエスは言われた。「その石を取りのけなさい。」死んだラザロの姉妹マルタは言った。
「**主よ、もう臭くなっています。四日になりますから。**」
- 40 イエスは彼女に言われた。「信じるなら神の栄光を見る、とあなたに言ったではありませんか。」
- 41 そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて言われた。
「父よ、わたしの願いを聞いてくださったことを感謝します。」
- 42 あなたはいつでもわたしの願いを聞いてくださると、わたしは知っておりましたが、周りにいる人たちのために、こう申し上げました。あなたがわたしを遣わされたことを、彼らが信じるようになるために。」
- 43 そう言ってから、イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、出て来なさい。」
- 44 すると、死んでいた人が、手と足を長い布で巻かれたまま出て来た。彼の顔は布で包まれていた。
イエスは彼らに言われた。「ほどいてやって、帰らせなさい。」
- 45 **マリアのところに来ていて、イエスがなされたことを見たユダヤ人の多くが、イエスを信じた。**
- 46 しかし、何人かはパリサイ人たちのところに行って、イエスがなされたことを伝えた。
- 47 祭司長たちとパリサイ人たちは最高法院を召集して言った。
「われわれは何をしているのか。あの者が多くのしるしを行っているというのに。」
- 48 **あの者をこのまま放っておけば、すべての人があの者を信じるようになる。**
そうなると、ローマ人がやって来て、われわれの土地も国民も取り上げてしまうだろう。」
- 49 しかし、彼らのうちの一人で、その年の大祭司であったカヤパが、彼らに言った。
「あなたがたは何も分かっていない。」

ヨハネの福音書の「エクス」

- 50 一人の人が民に代わって死んで、国民全体が減びないですむほうが、自分たちにとって得策だということを、考えてもいない。」
- 51 **このことは、彼が自分から言ったのではなかった。** 彼はその年の大祭司であったので、イエスが国民のために死のうとしておられること、
- 52 また、ただ国民のためだけでなく、散らされている神の子らを一つに集めるためにも死のうとしておられることを、預言したのである。
- 53 **その日以来、彼らはイエスを殺そうと企んだ。**
- 54 そのために、イエスはもはやユダヤ人たちの間を公然と歩くことをせず、そこから荒野に近い地方に去って、エフライムという町に入り、弟子たちとともにそこに滞在された。
- 55 さて、ユダヤ人の**過越の祭り**が近づいた。多くの人々が、身を清めるため、過越の祭りの前に地方からエルサレムに上って来た。
- 56 彼らはイエスを捜し、宮の中に立って互いに話していた。
「どう思うか。あの方は祭りに来られないのだろうか。」
- 57 祭司長たち、パリサイ人たちはイエスを捕らえるために、イエスがどこにいるかを知っている者は報告するように、という命令を出していた。

●イエスは大声で叫ばれた。「ラザロよ、**出て来なさい。**」

「**出て来なさい**」とは、**墓の中から出てくるということ**です。すでにラザロは死んで四日も経っており、腐っているはずであった。エゼキエル 37 章の「枯れた骨の Vision」を参照。

●ヘブル人への手紙 13 章 13 節に「宿営から出て」というフレーズがあります。

【新改訳 2017】ヘブル 13:13

ですから私たちは、イエスの辱めを身に負い、**宿営の外に出て、みもとに行こうではありませんか。**

τοῖνον ἐξερχώμεθα πρὸς αὐτὸν ἔξω τῆς παρεμβολῆς, τὸν ὄνειδισμὸν αὐτοῦ φέροντες·

「**出て行く**」の「エクセルコマイ」(ἐξέρχομαι)。πρὸς αὐτὸν は「彼のところに」。「宿営」は「パレムボレー」(παρεμβολή)、ヘブル訳は「マハネ」(מַחֲנֶה)で「陣営」とも訳される。複数になると「マハナイム」となります。ヤコブは神の陣営に守られていたにもかかわらず、エサウを恐れたのです。

●ここでの「宿営」とは直接的には「ユダヤ教」です。すなわち、キリストを拒絶したユダヤ教の宗教組織、ユダヤ教の制度を意味します。キリストを拒絶したのは**ユダヤ教**だけではなく、**この世**もキリストを拒絶したからです。ですから、この「宿営」ということばを、「この世」、すなわち人間の「肉」と言えます。宿営の中に安住し、その中に営むことのすべてを意味すると言えます。キリストは、この「宿営」の中にはおられません。キリストのおられるところはどこでしょうか。それは「イエシュアの御名」があるところ。「私たちの霊の中」ともいえ

ヨハネの福音書の「エクス」

るし、「天の御座」とも言えます。イエシュアの中へと信じる私たちは、この世ではなく、またキリスト教という宗教組織や宗教制度からでもなく、そこから離れて、イエシュアの御名の權威のもとに集まるべきです。なぜなら、以下の理由からです。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 13 章 14 節

私たちは、いつまでも続く都をこの地上に持っているのではなく、むしろ来たるべき都を求めているのです。

【新改訳 2017】ヘブル人への手紙 11 章 8～12 節

8 信仰によって、アブラハムは相続財産として受け取るべき地に出て行くようにと召しを受けたときに、それに従い、どこに行くのかを知らずに出て行きました。

9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束をとともに受け継ぐイサクやヤコブと天幕生活をしました。

10 堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都の設計者、また建設者は神です。

11 アブラハムは、すでにその年を過ぎた身であり、サラ自身も不妊の女であったのに、信仰によって、子をもうける力を得ました。彼が、約束してくださった方を真実な方と考えたからです。

12 こういうわけで、一人の、しかも死んだも同然の人から、天の星のように(イスラエルの残りの者)、また海辺の数えきれない砂のように(異邦人)数多くの子孫が**生まれた**(アオリスト受動態)のです。

→創世記 22 章 17 節の成就。

●信仰の父アブラムは、「レフ・レハー」(לֵךְ לְהָאָרֶץ)との主のことばに従い、偶像礼拝の地から**出てきた**のです。

【新改訳 2017】創 12:1

主はアブラムに言われた。

「あなたは、あなたの土地、あなたの親族、あなたの父の家を離れて、**わたしが示す地へ行きなさい。**

וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל־אַבְרָם לֵךְ לְהָאָרֶץ מֵאֶרֶץ כְּנָעַן וּמִמְּוֹלָדֶיךָ וּמִבֵּית אָבִיךָ אֶל־הָאָרֶץ אֲשֶׁר אֲרָאָךְ :